これは著者最終稿（校正前原稿）です。
実際に出版された原稿とは、一部文章が異なります。
引用の際は必ず出版された原稿を参照して下さい。

トーマス・ルックマンのプロトソシオロジー
――社会科学の認識論的再帰性と現象学――

高艸　賢

一　問題意識――ドイツ語圏の知識社会学

一九五九年に死去したアルフレート・シュッツの理論は、彼の『著作集』の出版によって世界的に知られることとなった。アメリカではシュッツから着想を得たハロルド・ガーフィンケルがエスノメソドロジーを創始し、日本でも「現象学的社会学」「意味学派」といった名称の下でシュッツ受容が進んだ。シュッツの理論が一九六〇年代以降の「反パーソンズ」の文脈で受容されてきたことは、その批判も含め、繰り返し論じられてきた（cf. 西原 一九九六）。

しかし、シュッツ理論の継承と発展に関しては、もう一つの系譜が存在する。それはドイツ語圏の知識社会学（Wissenssoziologie）の展開である。ピーター・バーガーとの共著『現実の社会的構築』（Berger and Luckmann 1966＝二〇〇三）でシュッツ現象学に基づいた知識社会学を打ち立てたトーマス・ルックマン（1）は、一九七〇年にコンスタンツ大学に着任して以来、ドイツ語圏でのシュッツ受容に大きな影響を与えてきた。ルックマンを中心とする研究者群は、しばしばコンスタンツ学派とも呼ばれる（2）。この半世紀の間にシュッツとルックマンを起点としてドイツ語圏で蓄積されてきた研究は、日本においては目下ほぼ全く知られていない（3）。この欠落は、シュッツ理論を批判的に継承し発展させるうえで看過できない障害となっている。「反パーソンズ」問題の磁場から離れた現象学的社会理論の系譜のひとつが、日本では埋もれたままになっているのである。

そこで本稿は、こうした研究の欠落を補う作業の一環として、ルックマンの「プロトソシオロジー」および「社会科学の認識論的再帰性」を検討する。ルックマンは、シュッツ現象学を経験科学としての社会学に対する基礎学として位置づけ、これをプロトソシオロジーと呼んでいる。この立場はシュッツ解釈としてドイツ語圏で広く受容されている（Eberle 2012）。また、認識論的再帰性とは、社会(科)学とその研究対象である社会的世界との間の循環関係のことである。認識主体である社会科学者は認識対象と共に社会的世界に属しており、社会的世界におけるコミュニケーションが社会科学的認識の前提条件となっている。プロトソシオロジーは、認識論的再帰性の構造を社会科学が反省的に解明するための出発点を提供する。

認識論的再帰性の問題に対するプロトソシオロジーの意義は何か。これが本稿のリサーチ・クエスチョンである。社会科学において認識主体と認識対象が共に社会的世界に属しているという事実自体は、広く承認されている。しかし、これを理論的・経験的に解明すべき現象として措定するとき、私たちは利用可能な方法が体系的に整理されているとは言えない現状に直面する（4）。ルックマンの論理構成を検討することで、プロトソシオロジー（現象学）が有力な方法の一つであることが示される。

こうした観点からのプロトソシオロジーの再評価は、日本のみならずドイツ語圏においても十分にはなされていない。極端ではあるが、ヨー・ライヒェルツのように、現実の社会

的構築の理論を継承する研究者（「第二世代と第三世代の『社会構築主義者』たち」）は少数の例外を除けばルックマンのプロトソシオロジーを継承・展開してはいない、と主張する者さえいる（Reichertz 2013: 60）。またフーベルト・クノーブラオホのように、「社会的現実の普遍学」としてのプロトソシオロジーを批判し「関係性」を起点とする社会理論を構築する試みもある（Knoblauch 2020、ドイツ語版原著は二〇一七年）。本稿もクノーブラオホと同じく「普遍学」の構想には一定の留保が必要だとする立場である（五節参照）。しかし本稿が目指すのは、プロトソシオロジーの放棄ではなく、理論的基礎と科学論的基礎を同時に探究する社会理論の構想を継承することである。この継承の方向性は、認識論的再帰性の問題から現象学的社会理論の系譜を見ることで初めて可能になるのである。

二　「社会科学の危機」と認識論的再帰性

本節では、ルックマンが経験科学としての社会学の基礎学としてプロトソシオロジーを提唱する際の問題意識を確認する。本節と次節で主に扱うテクストは、一九七三年の「哲学・科学・日常生活」（Luckmann [1973] 1983＝一九八九）、同じく一九七三年の「社会的コミュニケーションの理論の諸相」（Luckmann [1973] 2007）、および一九七九年の「現象学と社会学」（Luckmann 1979）である。これらのテクストでは、社会科学的認識の前提構造を問う学という意味での社会科学認識論が展開されている。

二・一　社会科学における認識論的再帰性

社会科学にとって社会的世界は二重の地位を有している。第一に、社会的世界は社会科学の認識対象である。社会科学に求められるのは、社会的世界の現象を記述し、測定し、説明することであり、その際に社会科学は社会的世界を質的ないし量的なデータとして扱う。第二に、社会科学者もまた社会的世界の中で生きている人間である。社会科学者はその生活史の中で日常生活と社会的現実に関するさまざまな知識を習得してきた人間であり、他者とコミュニケーションを行う人間であり、さらに科学者として社会的現実から「知るに値する」（Weber 1904＝一九九八）ものを選択する人間である。こうしたこと全てが、社会科学的認識の前提条件となっている。

この二重性をルックマンは「認識論的再帰性」と呼んでいる。ルックマンは認識論的再帰性の問題を次のように定式化している。

> ここで社会科学にとってある問題が生じる。すなわち、日常生活は社会科学の対象であるが、科学的コミュニケーションは日常生活のコミュニケーションに基づいている、という問題である。コミュニケーションが科学の前提かつ対象であるという循環は避け難いように思われる。私たちが社会科学の認識論的再帰性（epistemologische Reflexivität der Sozialwissenschaft）について語るとき、私たちは明らかにこの循環に関わっているのである。社会的現実に関する理論化は当の現実を前提とする――理論的反省の対象としてのそれだけではなく、主観的過程としてのそれも、前提とするのである。（Luckmann 1979: 201　強調は引用者）

ルックマンの「コミュニケーション」は「意識のレベルと社会のレベルの中間」(Luckmann [1973] 2007: 92) で生じる相互行為を（言語的・非言語的、直接的・間接的を問わず）すべて含んでいるが、本稿がとりわけ注目するのはコミュニケーションにおける知識である。コミュニケーション過程は、知識の獲得・使用・伝達・産出に関わる社会的過程である。コミュニケーションが社会科学の前提であるのは、社会科学者自身がそうした社会的過程に初めから巻き込まれているからに他ならない。

「社会科学の認識論的再帰性」という標題の下に示される二重性あるいは循環関係は、「一次的構成と二次的構成」（シュッツ）、「二重の解釈学」（ギデンズ）、「セカンド・オーダーの観察」（ルーマン）などといった用語ですでに社会学者の間に浸透している。ルックマンの場合、社会科学の認識論的再帰性という前提を反省的に吟味することがプロトソシオロジーの取り組むべき課題とされる。プロトソシオロジーについては、次節で詳しく検討する。

二・二　「社会科学の危機」とは何か

ルックマンがプロトソシオロジーを提唱する際の問題背景となっているのが、「社会科学の危機」である。エトムント・フッサールによれば、ガリレオ以降の自然科学が自然という対象の数学化・形式化を極限まで押し進め、生世界（Lebenswelt）に「理念の衣」を覆いかぶせたことで、科学は生世界という基盤を忘却し「危機」に陥った（Husserl 1954＝一九九五）。ルックマンはフッサールにならい、社会科学に認識論的反省(5)が欠落した状態を「社会科学の危機」と呼ぶ。

> ［社会的現実と社会科学における認識論的再帰性の源泉と帰結についての］そうした反省がなければ、科学一般の意義（relevance）、とりわけ社会科学の意義を仮定することはできても、これを説明することはできない。そして、その意義を説明できないことが、危機の兆候なのである。（Luckmann 1983: 31＝一九八九：六三　訳文は一部変更）

他の多くの社会理論家と同様に、ルックマンも「統一科学」を志向する論理実証主義をこの危機の一事例として挙げている。しかし、批判されるのは自然科学を模範とする科学観だけではない。ルックマンは「新プラトン主義」ないし「観念論」の立場――そこで言及されているのは歴史主義者、ディルタイ、新カント派、ウィンチ、「批判的社会学」、ネオマルクス主義などである――もまた、社会科学の危機の事例として挙げる（Luckmann [1973] 1983: 16＝一九八九：三九）。あまりに雑多な立場・人物が「観念論」の括りに押し込められているが、ここではそのことは不問としよう。

本稿において重要なのは、プロトソシオロジーとしての現象学が要請された背景に科学論的・認識論的問題が存在していたことである。科学はいかなる手続きによって知を産出するのか、認識論的再帰性を前提条件とする社会科学が知を生み出すことはいかにして可能か、日常知と科学知はどのような関係にあるのか、等々の問題がここでは体系的に解明されるべき問題として提起されている。そしてこれらの問題はシュッツにとっての中心的問題であった（高艸　二〇二〇）。シュッツの遺稿をもとにした『生世界の構造』（Schütz und

Luckmann [1979/1984] 2003＝二〇一五）の編纂過程でルックマンが方法論に関する原稿を除外したことや、ルックマン自身がその後の著作で科学論を体系的に展開していないことに起因して、シュッツ－ルックマンの科学論的問題の継承は現在では議論されることが少なくなっている。しかし、科学論に照準を合わせることで、ルックマンの業績を『現実の社会的構築』（およびその経験的研究方法への拡張としての「コミュニケーション・ジャンル分析」）に限局しない形で評価することも可能なのである。

三　プロトソシオロジーの論理構成

本節では、ルックマンのプロトソシオロジーの理論構成を明らかにする。プロトソシオロジーという名称は、パウル・ローレンツェンやペーター・ヤニッヒらの「原物理学（Protophysik）」に由来する（Luckmann [1973] 1983＝一九八九、1990）。ここで proto という接頭辞が意味するのは、経験科学の概念構築に論理的に先行する次元を探究するという方向性である。Protophysik は経験科学としての物理学に先立つ測定という行為を、Protosoziologie は経験科学としての社会学に先立つ「一次的構成物」の世界を、解明するのである（6）。

三・一　「《現象学的社会学》は存在しえない」――現象学と社会学の峻別

ルックマンはしばしばシュッツやバーガーらと共に「現象学的社会学」というカテゴリーに括られるが、彼自身は「現象学的社会学などといったものは存在しない」（Luckmann 1979: 196）と断言している。ルックマンの主張はこうである。現象学とは「自我論的」な学問、つまり「私」という一人称の視点から開かれる経験の普遍的構造を探究する学問であり、この探究は意識に対する反省という仕方で遂行されるがゆえに「反省的」な学問である。これに対し社会科学は、客観的世界の説明を目指す学問である。経験科学としての社会科学は、哲学的な素朴さを甘受し、歴史的・社会的・文化的世界を「帰納的」に探究する。現象学と社会(科)学は互いに結びついているが、混同されてはならない。これがルックマンの立場である。

このように現象学を社会科学から峻別することで、現象学には二つの任務が与えられる。第一に、科学的認識活動としての社会学に対する反省の契機を提供するという任務であり、第二に、人間の経験の次元を社会理論の基礎に据えるという任務である。前者を科学論的基礎の問題、後者を理論的基礎の問題と言い換えても良いだろう。

> 現象学は社会学と二つの仕方で結びついている。一方では、現象学は理論的活動についての体系的命題を提供し、それによって論理学と科学の一般哲学を提供している。他方で現象学は、人間の経験を社会理論の基礎として再発見する哲学である。（Luckmann 1979: 205）

社会科学の認識論的再帰性に直接関わるのは第一の任務である。対して、第二の任務は社会科学の宇宙論的機能に関わる。ルックマンによれば、世界の理解を提供するという科学の宇宙論的機能は、社会科学において適切に果たされていないという（Luckmann 1974,

[1973] 1983＝一九八九)。ルックマンはこの問題の源泉を「ガリレオ的宇宙論」に求めている。「ホモ・エコノミクス」のように人間を何らかの本性＝自然（nature）に還元する「ガリレオ的宇宙論」から完全に独立した新たな理論的基礎を確保することが、現象学の任務とされる。以上の二つの任務を通じて現象学は、社会科学、とりわけ社会学の確固たる基盤を提供することができるとされる。

三・二　経験の不変構造の析出――現象学的還元という方法と社会的現実の普遍学

以上の区別に対応する形で、現象学は構成（Konstitution）を扱う学、社会(科)学は構築（Konstruktion）を扱う学としてそれぞれ規定される（Luckmann [1999] 2007)。構築は、社会的・文化的・歴史的に現実が築き上げられる過程、ないしそのようにして築き上げられたものを指す。これに対し構成は、そうした社会的現実の構築過程においてつねに働いている意識の作用を指す。『現実の社会的構築』では、第二部「客観的現実としての社会」と第三部「主観的現実としての社会」が構築を扱った部分に、第一部「日常生活における知識の基礎」が構成を扱った部分にあたる。プロトソシオロジーとしての現象学は構成を扱う学であるので、以下では構成という概念について論述する。

現象学において構成とは、経験の対象が「あるがままに現出し、展開し、分節化し、自らを示すということを許す過程」(Zahavi 2003＝二〇〇三：一一〇）を指す。対象を構成する意識の働きは志向性と呼ばれる。つまり志向性とは、何かが何かとして立ち現れることを可能にする意識の働きである。ルックマンはフッサールに従いつつ、意識が対象をいかにして構成するかを解明する学として現象学を捉えている。『イデーンⅠ』においてフッサールが目指すのは、「この上なく完璧な無前提性」(Husserl 1976: 136＝一九八四：九）から出発しあらゆる学の基礎を与える「第一哲学」としての現象学である。そのためにフッサールが提起する方法が、現象学的還元である。

ルックマンのプロトソシオロジーが依拠する方法も現象学的還元であるとされる。ルックマンは、現象学的還元によって歴史的に可変的な具体的要素と歴史的に不変の本質構造とを区別できると主張する。

> いかなる任意の具体的経験から出発しても、特殊な――つまり生活史的・歴史的に可変的な――具体的要素と「形式的」構造（それ無しでは人間の具体的経験は考えられないような構造）とを区別することがつねに可能である、ということである。ある具体的な社会的・歴史的世界に属する経験の層を、それが築き上げられている本質的構造から分離することが、可能なのである。(Luckmann [1999] 2007: 129-30)

経験の不変構造を析出する試みの一例として、日常生活世界における言語の構成の現象学的分析がある(Luckmann [1973] 2007: 102-8)。現象学的還元によって主観的体験(意識)から出発するルックマンは、まず言語の基底層として音のパターンの統握を指摘する。次いでルックマンは、音のパターンが時間的な流れ（より正確には内的時間と外的時間の同期した時間の流れ）の中で捉えられると論じる。さらにルックマンは、対面状況における他者と共に同じ音を聞く経験、他者から発出される音を他者の意識のしるし（Anzeichen）として捉える経験へと議論を進める。最終的にルックマンは、客観化された表現形式としての記号

(Zeichen)――誰がいつどこで使用するかによらず一定の記号体系――の構成を論じる。このように、ルックマンは歴史的に可変の層（ここでは記号体系）と不変の層（ここでは意識）を区別し、後者を前者の基層として捉えるのである。

以上から、ルックマンはプロトソシオロジーを社会的現実の普遍学（mathesis universalis）と特徴づける。社会的現実の普遍学としてのプロトソシオロジーによって、ルックマンは文字通り古今東西のすべての人間に不変の経験構造を抽出しようとしている。あるインタビューの中では、「私たちはみな人間であり、同じ進化上の遺産を持っており、多少は外見が似てさえいるのであり、おそらく痛みを同じような仕方で感じる」（Dreher and Göttlich 2016: 31）と語っている。

以上がルックマンのプロトソシオロジーの概要である。ルックマンは、社会科学の基礎学には経験の構造に定位した「構成」の次元の探究が不可欠であると論じる。プロトソシオロジーは、「人間行為についての言明の一般的原型（matrix）」（Luckmann 1990: 14）を扱うことで、科学的知識を含む人間の知識の獲得・使用・伝達・産出のメカニズムを解明している。このことが科学論的にいかなる意義を有しているかについて、次節で立ち入った検討を行う。

四　基礎づけ問題を立て直す――知識の社会理論

本節では、プロトソシオロジーによって「社会科学の基礎づけ」の意味が問い直されることを示す。そのためにまずはフッサールの生世界概念に立ち戻る。

一九三五年のプラハでの講演を基にした『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（Husserl 1954＝一九九五）においてフッサールは、自然科学の数式や記号が科学に先立つ直観的世界を覆い隠してしまっていると指摘する。この直観的世界こそが「科学の意味基底」であると考えるフッサールは、これを生世界と呼び、学問一般を生世界から基礎づけ直そうとする。主観的－相対的な世界としての生世界は、客観的科学からは「単なる主観にすぎない」「ドクサの領域」であるとされる。しかし、フッサールは主観的－相対的な世界としての生世界にこそ、普遍性の基盤があると考える。学問の普遍的基盤を追求するフッサールは、客観性を普遍性と同一視することに慎重である。なぜなら客観的な学問は、主観的－相対的な生世界を捨象することで自らの構築物の普遍性を唯一絶対の基準として成り立たせているからである。ここでフッサールは、「経験し、認識し、真に具体的に能作している主観性をまったく問題にしないで、『客観性』というようなことを語る素朴さ」（Husserl 1954: 99＝一九九五：一七六）を批判し、主観的－相対的な生世界に学問の基礎を見いだすべく考察を進めている。

このような論述の中で導入される生世界概念は、「客観的＝科学的世界の明証上の基底としての知覚的経験の世界」（鷲田　一九九三：二二六）を指す。しかし鷲田がクレスゲス（Claesges 1972＝一九七八）を踏まえて述べるように、これは狭義の生世界概念である。フッサールにはもう一つ、広義の生世界概念が存在する。それは「理論的認識をも一つの実践として包含する実践的＝文化的世界」（鷲田　一九九三：二二六）としての生世界である。

論理的意味での客観的理論（…）は、生世界のうちに、したがってそれに属している

根源的明証性のうちに根をおろし、そこに基礎をおいている。客観的諸科学は、ここにその根をおろしているからこそ、われわれがつねにそのうちで生きており、研究者としても、さらにまた共同研究者としてもそこで共同して生きている世界に、つまりは普遍的な生世界に、たえず意味上の関係をもっているのである。だが、そのさい客観的諸科学は、学以前の人たち――個人としても、また学的活動において共同し合うことになるような人たちとしても――の作業として、生世界に属している。（Husserl 1954: 132＝一九九五：二三二-三　訳語は一部変更）

狭義の生世界概念においては「客観的科学から生世界へ」という遡行が主張されるのであるが、広義の生世界概念においては客観的科学もまた生世界の中で営まれる活動として捉えられる。

鷲田が的確に指摘するようにこの二義性は、科学の基礎づけをめぐる問題の立て方に重大な変更を要求する。学的か日常的かを問わず一切の知識が「つねに歴史的に生成している生活世界的な経験によって媒介されている」（鷲田　一九九三：二三四）以上、『イデーンⅠ』で宣言されたような完璧な無前提性から出発する学知の究極的基礎づけは不可能なのである。

ルックマンが生世界への還帰に言及するとき、基本的に念頭に置かれているのは狭義の生世界概念、つまり「明証上の基底としての知覚的経験の世界」である。しかし、必ずしもルックマンにおいて広義の生世界概念が無視されているとは言えない。ルックマンの見解は、一九九〇年の「生世界――流行概念か研究プログラムか？」（Luckmann [1990] 2017）と題する小論から窺い知ることができる。

ルックマンはフッサールとシュッツの生世界論を踏まえて、「独断的・最終的な究極的基礎づけ」（Luckmann [1990] 2017: 51）の不可能性を認識している。代わりに基礎づけの問題として提示されるのは、「歴史的社会的現実の客観的性質は間主観的人間行為において産出される（『社会的に構築』される）ということ、そしてそれは世界内での主観的方位づけの普遍構造に基づくということ」（Luckmann [1990] 2017: 51）をめぐる社会理論的問題である。科学的知識が間主観的人間行為を通じて産出される構造を問うこと、これが伝統的な「究極的基礎づけ」に代わる新たな基礎づけ問題である。広義の生世界概念が含意するように、科学はその他の文化的形象と同じく人間の社会的行為の産物とされる。認識論（Erkenntnistheorie）は知識の社会理論[7]として再定式化される。三・一で区別したプロトソシオロジーの二つの任務、すなわち理論的基礎と科学論的基礎を与えるという任務は、このように知識の理論として合流するのである。

プロトソシオロジーの意義は、学の究極的基礎づけという伝統的理念が放棄された後で基礎づけ問題を立て直したことにある[8]。コミュニケーションが科学の前提かつ対象であるという循環構造が、社会科学的認識の前提構造である。志向性に定位して知識の獲得・使用・伝達・産出メカニズムを分析することで、プロトソシオロジーはこの前提構造を知識の社会理論の問題として扱う。そうすることで、科学的知識を独断的に特権視することなく、かといって科学的知識とその他の知識の区別を初めから断念することもない形で、社会科学的認識の意味を問うことができるのである。

こうした基礎づけ問題の立て直しの方針は、レリヴァンス概念によって科学的知識と日

常的知識の構造をともに射程に収めたシュッツの理論において、すでに示されていた（高艸二〇二〇）。ルックマンの貢献は、この方針に沿った社会理論の可能性を示した点にある。シュッツからルックマンへの理論展開の中で、社会理論が社会学に理論的基礎と科学論的基礎を同時に与えるような議論の領域であることが示されたのである。

五　課題――地平の媒介的機能

前節まで、認識論的再帰性の問題におけるプロトソシオロジーの意義を明らかにしてきた。しかしプロトソシオロジーの研究はルックマンにおいて萌芽的な「プログラム」（Luckmann [1990] 2017: 50）にとどまっており、課題も多い。そこで最後に、プロトソシオロジーをめぐって検討されるべき課題として、「地平の媒介的機能」の問題に触れる。

後期フッサールによる生世界概念の導入と共に、現象学は志向性の働きを媒介するものに注目を向けることとなった。例えば手元にある携帯電話を携帯電話として把握することができるためには、私は過去の経験によってそれが携帯電話であるという前提知識を持っていなければならず（時間地平、歴史的地平）、それが「携帯電話」という名称の道具であることを知っていなければならず（言語共同体）、それを手に取って使用するためには同じ空間内の諸物体への注意を背景に退かせて携帯電話のみに注意を向けなければならない（空間地平）。志向性の働きは、つねに共に与えられた地平に媒介されている（cf. Husserl 1999: 26-7＝一九九九：二三-四）。新田（二〇〇六：四〇九）が論じるように、こうした媒介的地平は「主題的なものに随伴しつつそれを浮き出させるように働く非主題的所与性」であり、それゆえ「半可視」的な存在である。

構成の次元と構築の次元は、地平の媒介的機能によって結ばれている。志向性の働きはつねに具体的な歴史的文化的世界の中で実現されている。ルックマンの議論では構成と構築の峻別のみが強調されるが、両者の結びつきによってそのつどの志向性が可能になっていることも重要である。

地平の媒介的機能は、『現実の社会的構築』の「社会の弁証法的モデル」における「内在化」の契機と解してはならない。内在化という概念では、そのつどの地平における志向性は捨象される。構成の次元と構築の次元の結びつきは、観察者の設定するモデルによってではなく、経験の構造に定位して示されねばならない。

とはいえルックマンは地平の媒介的機能に相当する議論を全くしていないわけではない。ドブ島の人類学的研究に依拠してコミュニケーション可能な対象とされる範囲が文化によって異なると論じた「社会的世界の境界」論（Luckmann [1970] 1983＝一九八九）は、構成と構築の双方の次元にまたがって展開されている。この論文でルックマンは、一方で他なる身体の構成、つまり私とは異なるもう一つの行為能力を有する身体の構成を、現象学的に探究している。そして他方で、他なる身体として構成される範囲は歴史的・文化的に可変の分類体系に依存すること（したがってドブ島の場合はヤムイモにそうした行為能力が認められること）を明らかにしている(9)。

社会的世界の境界論が示しているのは、構成と構築の相互関係において機能する志向性である。この相互関係を視野に入れて初めて、可変／不変という区別を考えることができる。ルックマンは歴史的に可変の現実を「構築」、歴史的に不変の経験構造を「構成」とし

て峻別するが、何が可変で何が不変かの区別は容易には決定できないということを、社会的世界の境界論は物語っている。『デカルト的省察』のフッサールが他我構成の不変構造として人間身体を前提としていたことを批判し、他なる身体の人間への限定は歴史的に偶有的であると見抜いたことから、ルックマンの社会的世界の境界論は出発している。近代社会に住まう人間にとって不変とされるものが、古今東西すべての人間の経験構造をなしている保証はない（10）。だとすれば、プロトソシオロジーがいかなる権利において「社会的現実の普遍学」を名乗りうるかについて、慎重な検討が求められる。少なくとも、「現象学は不変の意識構造を探究し、社会学は可変の歴史的社会的構造を探究する」という二分法は見直さざるを得ない。媒介された志向性を前提とするとき、クノーブラオホのように現象学的社会理論の起点を「関係性」に置くというのは有力な選択肢である（Knoblauch 2020）。

まとめると、地平の媒介的機能による構成次元と構築次元の結びつきの問題、「社会的現実の普遍学」の普遍性の問題の二点において、プロトソシオロジーは解決すべき課題を抱えている。ルックマン自身は科学論的反省の作業よりも「コミュニケーション・ジャンル分析」（11）と呼ばれる方法論の構築に注力したため、この課題には着手しなかった。プロトソシオロジーの社会理論としての展開は、後継世代に託された仕事である。

六　結論

本稿は、ドイツ語圏のシュッツ理論の受容と展開に関する研究の欠落を埋めるべく、ルックマンのプロトソシオロジーおよび社会科学の認識論的再帰性について検討してきた。本稿のリサーチ・クエスチョンは、「認識論的再帰性の問題に対するプロトソシオロジーの意義は何か」であった。本稿は、認識論的再帰性をめぐるルックマンの問題意識を概観したのち（二節）、プロトソシオロジーの論理構成を経験の構造に定位した「構成」の次元の探究として再構成し（三節）、次いで生世界概念の二義性に由来する「学の基礎づけ」の意味の問い直しについて論じた（四節）。以上の検討から、プロトソシオロジーの意義は、学の究極的基礎づけという伝統的理念が放棄された後で基礎づけ問題を立て直したこと、志向性に定位して知識の獲得・使用・伝達・産出メカニズムを分析することで認識論の問題を知識の社会理論の問題として扱ったことにある、と論じた。最後に、地平の媒介的機能による構成次元と構築次元の結びつきの問題および「社会的現実の普遍学」の普遍性の問題を手短に検討し、プロトソシオロジーはさらなる展開が必要であることを指摘した（五節）。

これまで日本においてほとんど知られることのなかったルックマンの理論について、本稿はその意義と展望を示した。プロトソシオロジーをいかに展開するかが、現象学的社会理論の可能性の試金石となるだろう。社会科学に対する現象学の意義を「主観性」という使い古された概念で矮小化しないためには、現象学の理論的意義と科学論的意義を同時に汲み上げる必要がある（12）。ルックマンの提唱するプロトソシオロジーは、そうした方向性を指し示している。ともあれ、二〇一六年に没したルックマンの知的遺産を整理する作業は緒についたばかりである（13）。

註

（1）トーマス・ルックマン（Thomas Luckmann, 1927-2016）の主要な研究主題は、社会

理論、宗教社会学、言語社会学である。宗教社会学の業績としては、世俗化論を批判した『見えない宗教』(Luckmann 1967＝一九七六）が有名であり、博士号も宗教に関する経験的研究で取得している。一九七〇年代以降のルックマンにとって、言語は卓越した重要性を有する主題となった。また『現実の社会的構築』の理論を経験的研究に利用可能な形で方法論化した「コミュニケーション・ジャンル分析」を提唱している。その他にも、道徳論、アイデンティティ論を扱った論文がある。業績の概観としては、Dreher（2007）、Dreher and Göttlich (2016)、Knoblauch et al. (2017) を、伝記的事実については Schnettler（2006）を参照されたい。

（2）特に重要な人物としては、社会科学的解釈学（解釈学的知識社会学）と呼ばれる方法論を展開しルックマンの後任としてコンスタンツ大学に着任したハンス＝ゲオルク・ゼフナーや、ルックマンの下で博士号を取得しコミュニケーション的構築主義と呼ばれる理論を展開しているフーベルト・クノーブラオホなどが挙げられる。コンスタンツ「学派」については、Schnettler（2019: 536）を参照。シュネットラーによれば、ルックマン自身はいかなる学派形成にも批判的であった。

（3）佐藤（一九八一：一六）がシュッツに関する論文の中でルックマンに言及している。

（4）磯直樹（二〇二〇）は、ピエール・ブルデューの認識論を再構成することでこの主題に貢献した著作として解釈できる。

（5）この文脈において、反省（Reflexion）と再帰性（Reflexivität）は明確に区別される。認識論的反省は学的認識についての学的認識のことであり、再帰性は社会科学と社会的世界との循環関係のことである。

（6）原物理学については Böhme Hg.（1976）を参照。なおハーバーマスは、社会科学においては測定の超越論的規則よりも解釈が重要であると強調している (Habermas 1970＝一九九一：一九〇)。

（7）社会理論（Sozialtheorie）という言葉については、森川（二〇二〇：一〇）を参照されたい。

（8）野家啓一も、学の究極的基礎づけは不可能であると認めた上で、学の基礎づけという問題を「放棄することではなく、むしろその意味づけを積極的に更新すること」（野家 一九八七：一九）が必要であると述べている。

（9）ルックマン自身は構成分析と構築分析の「パラレルアクション」(Luckmann [1999] 2007: 131; Dreher 2007: 11) という言い方をする。ただ、同時並行的＝パラレルに探究された構成次元と構築次元がどのように理論的に結び合わされるかについては、何も語っていない。

（10）「幾何学の起源について」の中で、フッサールは生世界概念の歴史主義的・相対主義的な解釈に抗って本質構造という「不変項」の存在を主張するが、それは自由変更という方法によって、つまり「生世界についておよそ考えうる可能性を通覧するさいに、すべての異文を一貫している――と、真に必当然的な確信をもってわれわれが確信しうるような――本質的な一般性をもった構成要素が必当然的な明証をともなって現れてくる」(Husserl 1954: 383＝一九九五：五二八　訳語は一部変更）ことによってだとされる。だが、自由変更による本質（形相）の抽出可能性にシュッツは批判的である。Schutz（1966＝一九九八）を参照。

（11）コミュニケーション・ジャンルは、「反復されるコミュニケーション問題への解決方法を組織化し、ルーティン化し、（多かれ少なかれ）義務的なものにする」（Bergmann and Luckmann 1995: 291）知識である。日常生活における（言語的）コミュニケーションには「ジャンル」と呼ばれる前もってパターン化された方法が存在しており、それを分析するのがコミュニケーション・ジャンル分析である。分析対象はゴシップや口論といったものからジョージアにおける乾杯の儀礼まで様々であり、またジャンルの構成要素の分析水準として、「内的構造」（韻律、スタイルなど）、「状況」（会話の組織化、参加者の地位など）、「外的構造」（ジェンダー、エスニシティ、制度など）の三つの水準が設定される（Günthner and Knoblauch 1995）。なお、ルックマンの言語社会学については Tada（2015）も参照。

（12）ルックマン理論を批判的に検討した最新の研究として Gros（2021）があるが、認識論的再帰性については十分に検討されていない。

（13）その一端を Endreß und Hahn Hg.（2018）に見てとることができる。

付記

本研究はJSPS科研費 20J00674 の助成を受けたものです。

文献

Berger, P. L. and T. Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York, Anchor Books.（山口節郎訳、二〇〇三、『現実の社会的構成――知識社会学論考』新曜社）

Bergmann, J. and T. Luckmann, 1995, "Reconstructive Genres of Everyday Communication, in Aspects of Oral Communication," ed. U. M. Quasthoff, Berlin & New York, Walter de Gruyter.

Böhme, G. (Hg.), 1976, *Protophysik: Für und wider eine konstruktive Wissenschaftstheorie der Physik*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.

Claesges, U., 1972, "Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff," in *Perspektiven transzendental-phänomenologischer Forschung: Für Ludwig Landgrebe zum 70. Geburtstag von seiner Kölner Schülern*, U. Claesges und K. Held (Hg.), Den Haag, Martinus Nijhoff.（鷲田清一・魚住洋一訳、一九七八、「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」（新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房））

Dreher, J., 2007, "Lebenswelt, Identität und Gesellschaft – Sozialtheoretische Reflexionen zwischen Phänomenologie, Wissenssoziologie und empirischer Forschung," in *Lebenswelt, Identität und Gesellschaft: Schriften zur Wissens- und Protosoziologie*, J. Dreher (Hg.), Konstanz, UVK.

Dreher, J. and A. Göttlich, 2016, "Structures of a Life-Work: A Reconstruction of the Oeuvre of Thomas Luckmann," *Human Studies*, Vol. 39, No. 1.

Eberle, T. S., 2012, "Phenomenological Life-world Analysis and Ethnomethodology's Program," *Human Studies*, Vol. 35, No. 2.

Endreß, M. und A. Hahn (Hg.), 2018, *Lebensweltheorie und Gesellschaftsanalyse: Studien*

zum Werk von Thomas Luckmann, Köln, Herbert von Halem Verlag.

Gros, A., 2021, "Thomas Luckmann on the Relation Between Phenomenology and Sociology: A Constructive Critical Assessment," *Human Studies*, published online.

Günthner, S. and H. Knoblauch, 1995, "Culturally Patterned Speaking Practices: The Analysis of Communicative Genres," *Pragmatics*, Vol. 5, No. 1.

Habermas, J., 1970, *Zur Logik der Sozialwissenschaften,* Frankfurt am Main, Suhrkamp.（清水多吉・木前利秋・波平恒男・西阪仰訳、一九九一、『社会科学の論理によせて』国文社）

Husserl, E., 1954, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, Den Haag, Martinus Nijhoff.（細谷恒夫・木田元訳、一九九五、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社）

――――, 1976, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, Den Haag, Martinus Nijhoff.（渡辺二郎訳、一九八四、『イデーン I-II』みすず書房）

――――, 1999, *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, Hamburg, Felix Meiner Verlag.（長谷川宏訳、一九九九、『経験と判断』河出書房新社）

磯直樹、二〇二〇、『認識と反省性――ピエール・ブルデューの社会学的思考』法政大学出版局

Knoblauch, H., 2020, *The Communicative Construction of Reality*, London & New York, Routledge.

Knoblauch, H., J. Raab und B. Schnetler, 2017, "Wissen und Gesellschaft: Grundzüge der sozialkonstruktivistischen Wissenssoziologie Thomas Luckmanns," in *Wissen und Gesellschaft: Ausgewählte Aufsätze 1981-2002*, H. Knoblauch, J. Raab und B. Schnettler (Hg.), Köln, Herbert von Halem Verlag.

Luckmann, T., 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, New York, The Macmillan Company.（赤池憲昭／ヤン・スィンゲドー訳、一九七六、『見えない宗教――現代宗教社会学入門』ヨルダン社）

――――, 1974, "Das kosmologische Fiasko der Soziologie," *Soziologie*, Vol. 2.

――――, 1979, "Phänomenologie und Soziologie," in *Alfred Schütz und die Idee des Alltags in den Sozialwissenschaften*, W. M. Sprondel und R. Grathoff (Hg.), Stuttgart, Enke.

――――, [1970] 1983, "On the Boundaries of the Social World," in *Life-world and Social Realities*, London, Heinemann Educational Books.（デイヴィッド・リード／星川啓慈／山中弘訳、一九八九、「社会的世界の境界について」『現象学と宗教社会学』ヨルダン社）

――――, [1973] 1983, "Philosophy, Science and Everyday Life," in *Life-world and Social Realities*, London, Heinemann Educational Books.（デイヴィッド・リード／星川啓慈／山中弘訳、一九八九、「哲学、科学、日常生活」『現象学と宗教社会学』ヨルダン社）

――――, 1990, "Towards a Science of the Subjective Paradigm: Protosociology," *Critique and Humanism*, Special Issue.

――――, [1973] 2007, "Aspekte einer Theorie der Sozialkommunikation," in *Lebenswelt,*

Identität und Gesellschaft: Schriften zur Wissens- und Protosoziologie, J. Dreher (Hg.), Konstanz, UVK.

————, [1999] 2007, "Wirklichkeiten: Individuelle Konstitution, gesellschaftliche Konstruktion," in *Lebenswelt, Identität und Gesellschaft: Schriften zur Wissens- und Protosoziologie*, J. Dreher (Hg.), Konstanz, UVK.

————, [1990] 2017, "Lebenswelt: Modebegriff oder Forschungsprogramm?," in *Wissen und Gesellschaft: Ausgewählte Aufsätze 1981-2002*, H. Knoblauch, J. Raab und B. Schnettler (Hg.), Köln, Herbert von Halem Verlag.

森川剛光、二〇二〇、「マルチパラダイムの終焉?——社会学アカデミー分離独立問題からみるグローバル化のドイツ社会学への影響」(『社会学史研究』四二号)

西原和久、一九九六、「シュッツとエスノメソドロジーの視座」(北川隆吉・宮島喬編『20世紀社会学理論の検証』有信堂高文社)

新田義弘、二〇〇六、『現象学と解釈学』筑摩書房

野家啓一、一九八七、「生活世界」(丸山高司・小川侃・野家啓一編『知の理論の現在』世界思想社)

Reichertz, J., 2013, "Grundzüge des Kommunikativen Konstruktivismus," in *Kommunikativer Konstruktivismus: Theoretische und empirische Arbeiten zu einem neuen wissenssoziologischen Ansatz*, R. Keller, H. Knoblauch und J. Reichertz (Hg.), Wiesbaden, Springer VS.

佐藤嘉一、一九八一、「自己理解と他者理解——A・シュッツの『社会的世界の意味構成』をめぐって」(『社会学評論』三二巻三号)

Schnettler, B., 2006, *Thomas Luckmann*, Konstanz, UVK.

————, 2019, "Thomas Luckmann und die Kultursoziologie," in *Handbuch Kultursoziologie. Band 1: Begriffe – Kontexte – Perspektiven – Autor_innen*, S. Moebius, F. Nungesser und K. Schenke (Hg.), Wiesbaden, Springer VS.

Schutz, A., 1966, "Type and Eidos in Husserl's Late Philosophy," in *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, The Hague, Martinus Nijhoff. (渡部光・那須壽・西原和久訳、一九九八、「フッサール後期哲学における類型と形相」『アルフレッド・シュッツ著作集第四巻　現象学的哲学の研究』マルジュ社)

Schütz, A. und T. Luckmann, [1979/1984] 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, UVK. (那須壽監訳、二〇一五、『生活世界の構造』筑摩書房)

Tada, Mitsuhiro, 2015, "From Religon to Language: The Time of National Society and the Notion of the 'Shared' in Sociological Theory," *Shakaigaku Nenshi*, Vol. 56.

高艸賢、二〇二〇、「アルフレート・シュッツの科学論——社会科学認識論における生と認識の問題」(東京大学大学院人文社会系研究科博士論文)

鷲田清一、一九九三、「地平と地盤のあいだ——〈生活世界〉という概念」(『岩波講座現代思想6　現象学運動』岩波書店)

Weber, M., 1904, "Die 'Objektivität' sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.19. (富永祐治・立野保男訳、一九九八、『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店)

Zahavi, D., 2003, *Husserl's Phenomenology*, Stanford, Calif., Stanford University Press.（工藤和男・中村拓也訳、二〇〇三、『フッサールの現象学』晃洋書房）

（たかくさ・けん　日本学術振興会特別研究員ＰＤ）